

非暴力平和隊・日本(NPJ) ニュースレター

第44号

2012年8月28日発行

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 1 階 A 室

Tel: 080-6747-4157 E-mail: npj@peace.biglobe.ne.jp

Fax: 03-3255-5910 Website: <http://np-japan.org/>

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

・ GPPAC ウラジオストック会議	安藤 博	2
・ NP 南スーダンの活動に関して	中原 隆伸	6
・ 北九州市での「非暴カトレーニング」報告	川辺希和子	10
・ 「大飯原発ゲート前の非暴力直接行動」	小林 善樹	11
・ 夏季カンパ御礼	事務局	13
・ 報告事項	事務局	14
・ 6月会計報告	大橋 祐治	15



Lakes State の Yirol 新事務所前で：前列右端 Kim Vetting 国際事務局次長、
後列中央 Tiffany Easthom 南スーダン責任者、左 2 番目岡田二郎君

GPPAC ヴラジオストック会議

安藤 博

ガキどおしが口をとがらせ「おまえが悪いんだ」と罵り合う、だんだん声が高くなり、いまにも掴みかからんばかり—8月も終わり近くにやってきた炎暑をさらに暑くするように、日韓両国政府（【政府】の法被を着込んだ政治家、役人）は“こどもの喧嘩”を地でいく領土紛争を演じています。

2012/7/6-8日、ヴラジオストックで行われたく武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ/東北アジア>（注：GPPAC/NEA）の第9回会議は、日本、中国、朝鮮半島、ロシアの市民が参加して、領土問題で国家が争う愚を市民の力で防ぐことを申し合わせました（「GPPAC/NEA ヴラジオストック会議の成果」参照）。この会議の直前、ロシアのメドベージェフ首相が国後島を訪問するなど、東北アジアの領土問題に、申し合わせたように一斉に火がついていましたから、偶然ながら大変よいタイミングの会議でした。

しかしその後、尖閣を巡って中国国内で反日デモが広がり、日韓が激しく言い争っているのをみると、ことし9月のAPEC首脳会議開催地であることからヴラジオストックを選んで行われたGPPAC会議が、無菌室で行われる純粋培養実験にすぎなかったような空しさを覚えることもあります。

領土紛争という愚劣な争いごとは、愚劣だからといって軽視するわけにはいきません。それは、一国の大統領や首相どうしの言い争いだけとどまるのではなく、その背後にある国民の感情と呼応し合っているか

らです。

例えば、韓国の李明博大統領が、竹島上陸、天皇の謝罪、親書の突き返しと、野田首相にいわせれば「どうしちゃったんだろう」というほどの対日強硬姿勢を見せている。そうした、反日エスカレーションの背景について、大統領の兄や側近が汚職で逮捕されるなどで、政権の支持率は17%と就任以来最低になっているといった政権の弱体化が指摘され、「領土」は国民大衆の受けを狙った政治ショウだと解説されています。裏返していえば、韓国国民には根強い反日感情があって、領土問題はそれに火をつける格好の材料だというわけです。

日本の側でも同じでしょう。反日発言・行動を見過ごせば、「なめられている」と世論が沸き立ってくることを政治家たちは心配し、同時にそれを利用しようとします。

とはいえ、どこまでいさかいが高じても、領土問題で日韓が戦火を交えるところまでいくことはないでしょう。一昔前ならその危険は十分あったでしょうが、経済面の依存関係が深く進んでいることなどによって戦争によるマイナスが「一昔前」よりはるかに大きくなっていること、そしてやはりわたしたちが唱導する「非暴力平和」が、市民運動家どおしの内輪の理想論を超えて、俗世にも広がりつつあることによるでしょう。

どう考えても愚かとしかいいえない争いに踏み込んでいくことを、人間社会は止めようとしません。しかし、だからこそその「GPPAC」であり「非暴力平和」であるわけです。

GPPAC ヴラジオストック会議は、冷戦の

名残りの紛争の火種をまだ多くかかえている東北アジアにおいて「GPPAC」「非暴力平和」が確かな働きをすることができる可能性を、領土問題とは別のことで示すことになりました。朝鮮民主主義人民共和国(「北」)から「朝鮮平和委員会」の代表二人が、2011/3/28-29日のGPPAC/NEA北京会議に続いて参加したことです(2011/4/26発刊の『NPJ ニュースレター』38号掲載の拙稿「『北』を迎えてのGPPAC交流」参照)。領土問題が主題の会議でしたが、2007年のGPPAC ウランバートル会議以来安藤が関心を持っていた”隠れた本題”、「『北』との市民交流」を、さらに前進させることが出来たと思います。

君島・共同代表とともに参加した2011年3月末のGPPAC北京会議の際は、「北」の出席者はほとんど聞き役に徹していて、「ピョンヤンがGPPAC/NEAの拠点(Focal Point)となることは考えられない」と言っていました。しかし今回は、「北」代表のプレゼンテーションでこの件、つまりピョンヤンをFocal PointにするかたちでGPPACに参画していくことについて、極めて積極的な発言をしました。会議の外でもFocal Pointになることの具体的な意味を質していたとのことです。

懸案のGPPACのグローバル代表団をピョンヤンに送る件も、ようやく目処が立ってきたようです。

<GPPAC>というグローバルな広がりを持つ市民の連帯に「北」の”市民”を迎え入れることが、政府間では一向に進まない東北アジア地域の平和・友好関係構築のため必須の課題です。今回、「北」を迎えて二

度目の交流が実現したことで、2010年末、GPPAC/NEAの創始者である吉岡達也・ピースポート代表が安藤などとともにピョンヤンを訪問し、<朝鮮平和委員会>などと接触した成果がはっきり現れてきたと喜んでいます。

注 Global Partnership for the Prevention of Armed Conflict (武力紛争予防のためのグローバルパートナーシップ)の頭文字を取ったのが「GPPAC」。2001年、国連のアナン事務総長が報告書の中で「紛争予防における市民社会の役割が大切」と述べ、紛争予防に関するNGO国際会議の開催を呼びかけた。これに応じて発足したプロジェクトで、東北アジア地域(NEA)では、日本のNGOピースポートが事務局となり、<非暴力平和隊・日本(NPJ)>などがメンバー団体として加わっている。各地域内の拠点都市(Focal Point)の代表が参加する運営会議で、地域紛争を防止するための協議を行っている。NPJからは、京都Focal Pointの君島共同代表が加わっている。ヴラジオストック会議には、安藤が代理で参加した。・・・・・・・・・・・・・・・・

ヴラジオストック湾内のルースキー島で2012年9月に開催されるAPEC首脳会談に向けて、島と市街地を結ぶ吊り鉄橋の工事が進んでいる。





会議を終えて、主催者の大学が用意してくれた湾内クルージングで、南北朝鮮の四人はむつまじく話し合っていた(内側の男女がソウル市代表)



会議に先立ち記念植樹が行われ、参加者が次々に鍬をとった



ホテル前で談笑する南北朝鮮の四人(背中を見せている男女が南)



国立海洋大学構内で行われたGPPAC/NEAの会議場(中央奥に「北」からの二人。他の参加者たちがラフな服装でいるなかで、きちんとしたネクタイ姿が目立った)

GPPAC/NEA ヴラジオストック運営会議の

成果 2012/7/12 事務局代表：

メレディス・ジョイス（ピースポート）

.....

GPPAC/NEA の第 9 回年次運営会議が、2012/7/6-7/8 日、ロシアのヴラジオストックで開催された。この会議は、GPPAC/NEA の事務局（ピースポート）とヴラジオストック Focal Point の国立海洋大学との共催で行われた。会議には、北京、香港、京都、ソウル、上海、台北、東京、ウランバートル、ヴラジオストックの各 Focal Point、並びに GPPAC のピョンヤンにおけるパートナー団体と GPPAC 本部/NEA 事務局からの合計 20 人が参加した。初日は、アジア太平洋地域の領土/国境に関する学術討議、あとの二日は GPPAC/NEA 運営グループとオブザーバーによる会議に当てられた。

7/6 日の学術討議「アジア太平洋地域の領土紛争に関する非政府間対話」は、国立海洋大学と GPPAC とが、北海道大学スラブ研究センターとロシア・パグウォッシュ委員会の支援を得て運営した。

ヴラジオストック市が開催地とされたのは、同市が旧ソ連時代には閉鎖されていた一方、いまや 2012 年 9 月の APPEC 首脳会議に向けて急速に変化しつつあることからして、極めて意義深いことである。会議はまた、ロシアのメドベージェフ首相が今週初め同市を訪れるとともに問題の北方領土の島のひとつに渡り、さらに日本政府が尖閣諸島 (Diaoyu/Daiyaoyutai) の帰属を問題にしているという、極めてよいタイミングで行われた。即ち、領土問題についての市民社会による対話と相互理解の必要性が高まっている、正にそのときに開催されたので

ある。

(中略)

会議参加者は、GPPAC/NEA 内部で、特に尖閣諸島 (Diaoyu/Daiyaoyutai) に関わる領土紛争に関する情報交換と討議と継続していくことに合意した。また、この問題に関するそれぞれの国での動きについて適宜情報を交換し合うとともに、将来問題が起こったときに備えて、メディアと一般社会に提供できるような基本文書を用意することにも合意した。参加者はさらに、軍事演習が緊張と紛争の脅威を高めること、問題領域近くでの軍事演習を止めるべきであること、を認めあった。

(中略)

GPPAC/NEA は、朝鮮国家平和委員会の代表を再び迎えることができた。(2011 年 3 月末の GPPAC 北京会議に次いで) 二度目である。わたしたちは、「北」との協調関係がさらに進み、2012 年の後半にはピョンヤンに (GPPAC の) 国際代表団を送ることができるようになることを期待している。市民社会が東北アジアにおける平和と安定をどのように進めていくことができるかについての討議も行われた。信頼醸成措置に関する意見の交換や六カ国協議が再開されるような環境をどのようにして作っていか、などについてである。

GPPAC/NEA は、人と人との関係・パートナーシップを育て、情報交換、協調行動・連携を継続的に行い、そして東北アジアに平和で持続性のある未来を築くという共通目標の達成に向けて市民社会が貢献していくためのネットワークを強化する上で、メンバーが集まって直接話し合う事の大切さを改めて確認し合った。

NP 南スーダンの活動に関して

2012年8月10日

中原 隆伸 (NPJ 元会員)

.....
注：本稿は私個人の見解であり、他のどの団体の見解も反映した内容ではありません。(南スーダン地図は末尾参照)

1. 歴史

2007年、NPがナイロビで総会を開催した際、IPCS並びにSONADというスーダンの団体が参加していたが、両団体はNPの原則・活動内容などを考慮し、検討の末NPにスーダンで活動することを依頼した。

その後、2009年まで2年間様々な調整を行い、資金的にもベルギー政府から2年間の資金供与を受けることが決定したため、2010年2月から本格的に活動を開始することになり、最初の事務所が西エクアトリア州に開設された。2010年7月7日にTiffanyさんがNP南スーダンのCountry Directorとして赴任した。(余談だが、インタビューした日は偶然にも彼女の南スーダン滞在2周年にあたった)

2. 各地での活動

NP南スーダンの活動は、インタビューをした2012年7月7日現在で約80人のメンバー(半数強が南スーダンのローカルスタッフ)が、全8チーム、同国の全10州のうちの5州(中央エクアトリア、西エクアトリア、レイク、ユニティ、ジョングレイ)で活動を行っている。それとは別にWomen's Peace Building

Teamが5チーム(中央エクアトリア州及び西エクアトリア州)活動している。その他、フアンドレイズがうまく行けば北バハルガザル州及び上ナイル州で活動することを計画している。以下各チームの活動を紹介する。

(1) Mundri (西エクアトリア州、ドナー：ベルギー政府。活動終了)

NPが最初に活動を開始した個所。最初の一年間はここでの活動に集中していた。北隣のレイク州との紛争が原因で6万人(1万6000人の聞き間違いの可能性あり。)もの避難民が発生したが、2011年前半にNPが西エクアトリア州とレイク州の両方にメンバーを派遣し、両州の部族長(chief)達に和平のための話し合いを持ってもらうよう呼びかけを行った。3度の会談がもたれ、その結果として和平合意が成立した。¹

現在は2年間の予定であった資金供与期間が終了したこともあり、また何より同地方の情勢が落ち着いてきたことから、事務所を閉鎖している。

(2) Nzara (西エクアトリア州、ドナー：ユニセフ)

同州の国境地帯で、元々ウガンダの反政府勢力であったLRA(Lord Resistance Army：神の抵抗軍)が出没し、民間人に被害が出ている。NP南スーダンのFTは国境沿いの地域に滞在することで

¹ なお、この経緯に関してはTiffanyさんがケーススタディーとしてまとめているため、それを後日翻訳し、NPJメーリングリスト上にて報告する予定。

護衛的プレゼンスの提供を通じて暴力行為の抑止に努めている。

(3) Juba (中央エクアトリア州、ドナー：ユニセフ)

同州における護衛的プレゼンスなどの活動を行っている(詳細未確認)ほか、今年前半にジョングレイ州で民族紛争が起こった際、当事者の3つの民族(Dinka、Nuer、Murle)で紛争によって怪我をした人たちがJuba市内の病院に搬送された際、安全の確保や食事、必要物資、医療などが全員に公平に与えられるように24時間体制でチームメンバーが同病院に滞在した。

また、2012年5月15日以降、約1万2000人の南スーダン出身者がスーダンから「帰還」し、ジュバ近郊の一時滞在所(Transit Site)に滞在した際、親以外の親戚と移動している子供が数十人規模で存在していたため、それらの子供を保護し、親と引き合わせる活動も行った。それ以外にも地元のNGO(Street Children Aid)など諸団体と協力しながら子供／若者の遊べるスペースを設置、バレーボールやサッカーなどのスポーツが出来る環境を整えたり、球技にあまり積極的でない女の子達も楽しめるような遊びを提供した。

(4) Yirol(レイク州、ドナー未確認)

詳細未確認(立命館大学の岡田君が訪問したのはここだとのこと。)

(5) Bentiu(ユニティ州、ドナー：ユニセフ)

ユニティ州の州都Bentiu市に滞在し、スーダンとの国境地帯であるMayom郡、Abiemnon郡、Pariang郡で児童の保護などの活動を行っている。児童保護の活動などが中心。活動が活発化しており、Abiemnon郡にsub officeを設置する手続きを行っている。

(6) Yida 難民キャンプ(ユニティ州、ドナー：UNHCR)

難民キャンプで護衛的プレゼンス、親の保護を受けられていない児童(unaccompanied minor)の保護、地元コミュニティとの紛争解決や共同資源マネジメントのためのサポートなどを行っている。

一例として共同資源マネジメントの活動例を挙げる。一般論として、Yida 難民キャンプに限らず、難民／国内避難民と元々その場所に住んでいた住民との間に紛争が起こるケースは存在する²。例えば井戸の周辺では武器を使用しての暴力や性暴力などが起こるケースが続いていた。NPは井戸の周辺にチームメンバーを派遣することで暴力が起こりにくい環境を作り、また地元の井戸管理委員会に非暴力的問題解決のトレーニングを提供することで水資源を巡る争いが暴力に発展し

²難民や避難民は援助の対象になりやすい。一方、地元住民はそうならないケースが存在するため、援助機関、及び難民／避難民に対して「自分たちも生活が苦しく、つらい思いをしているのにどうして自分たちは支援されないのか」といった不満が募る。また、水や土地などの有限の資源が大勢の難民／避難民によって使用されるため、地元住民のための資源が不足するといった事態も想定され得る。

ないようサポートを行っている。

(7) Waat、Duk (Bor)、Pibor (ジョングレイ州、ドナー：UNHCR)

ジョングレイ州は大別して3つの部族 (Dinka 族、Nuer 族、Murle 族) がそれぞれ多く住む地域に分かれている。2012 年前半に Dinka 族と Nuer 族の若者が Murle 族の住む地域を襲撃したという事件が発生、Murle 族の若者に対して反撃も行い、同州の広範囲で多くの避難民が出る事態が発生した。NP 南スーダンは Duk 市 (Dinka 族の地域。2012 年 7 月当時は雨期の影響で交通などが遮断されてしまうため州都でもある Bor 市に事務所を一時的に移転している)、Waat 市 (Nuer 族の地域)、Pibor 市 (Murle 族の地域) にそれぞれチームを派遣し、活動を行っている。3 つの部族の町にそれぞれチームを設けるのは、「特定の部族に肩入れしない」という Nonpartisanship の原則に従ってである。Jonglei 州では現在、(襲撃に参加した若者たちの?)武装解除が行われているが、いまだに民間人が犠牲になる事件が発生している。NP 南スーダンは UNMISS (国連の PKO 部隊) の警察部隊に呼びかけ、彼らと一緒に治安パトロールをすることを提案し、現在では UNMISS の軍部隊、南スーダン警察も交えた 4 者で治安維持のパトロールを行っている。

(なお、Pibor に Masa さんという日本人の方が 2012 年 4 月から赴任しているとのこと。今後お会いして、本人の許可が頂ければお話の内容をまた皆さんに報

告したい。)

(8) Women's Peace Building Team (西エクアトリア州及び中央エクアトリア州、ドナー未確認)

現在、西エクアトリア州に 3 チームと中央エクアトリア州に 2 チーム、Women's Peace Building Team (以下、WPBT と略) が存在している。南スーダン人のみでのチームを立ち上げたとき、なかなか女性が男性の前で発言出来なかったという経験から女性のみでのチームを立ち上げることにしたのだという。(WPBT の活動の詳細についても後日報告予定。)

(9) ファンドレイズ中(北バハルガザル州、上ナイル州)

ファンドレイズが成功次第、国境沿いの 2 州でも活動する予定 (2012 年 7 月 7 日現在)。北バハルガザル州に関しては US Institute for Peace から 1000 万円程の助成金を獲得しているが、より一層の資金獲得が必要。

3. NP チーム、Tiffany さん自身に関して

(1) NP チームの構成

約 80 人、International が 35 人程、National が 45 人程。

(2) ドナー (資金拠出先)

主要なドナーは国連関係、特にユニセフ (ジュバでの活動など、一部は日本政府がユニセフ経由で資金を出している)、皆さんの税金が NP に使われている事になります。)と UNHCR。ドナー機関の使命を反映して、ユニセフ支援のプロジェクトは児童の保護、UNHCR 支援のプ

プロジェクトは難民の保護を特に意識した活動になっている。

その他にスウェーデン政府、UNDP、ベルギー政府、スペイン政府、US Institute for Peace など。民間団体が主要ドナーとしては存在せず、国連にドナーが集中しているのはあまり望ましい状態ではないと Tiffany さんも認識しており、新たなドナーの開拓が望まれている。

(3) Tiffany さん赴任前のスリランカでのビザ取得問題

赴任前、彼女は NP スリランカの Country Director として活動していた。ブリュッセルの国際本部から、6 週間南スーダン南部（当時：現在の南スーダン）で調査をしてほしいと依頼され、スリランカを出国した。戻ってきたとき、彼女は（出国前に 3 か月のビザが与えられていたにも関わらず）7 日間の滞在許可しか与えられなかった。同国大統領の弟である防衛大臣の指令でそうなったというが、同国の選挙で「大統領側に不利な報道」をしないよう、強いプレッシャーを受けていた国内の NGO（PAFFREL など）や Transparency International のスタッフ、及びジャーナリストの護衛的同行をしたことに対する防衛大臣からの「懲罰」ではないか、と語っている。7 日が過ぎた後、再度 14 日の滞在許可が与えられたが、それ以後はもう一人のスタッフとともに出国することを余儀なくされた。出国に際してはプレスリリースなどの形で同国政府の決定に対し NP として抗議することも検討したが、熟慮の

結果そうしなかった。仮にそうしていたら、その後一年間同国での事務所を維持することはできなかったかもしれない、と Tiffany さんは回想している。

(4) 軍事組織との関係について

南スーダンの軍事組織（SPLA、国連軍）と一緒に行動するのは現実的という点と仕方ない点もある。また、実際に彼らは現場で影響力を保っており、彼らを除外して活動を行うのは全てのアクターを招いて活動を行うという観点からも望ましくない。

一例として、西エクアトリア国境地帯での「Arrow Boy」達との協働関係を挙げる。彼らは LRA の暴力から自らのコミュニティを守るために弓矢などの伝統的武器などで武装した集団で、他の軍事組織が LRA に対する対抗手段として機能していない現状、自らのコミュニティを守るためのもっとも有力な手段だった。NP 南スーダンとしては武装、非武装はともかく、目的（コミュニティの保護）は同じであるため、彼らと協力して活動している。



北九州市での 「非暴力トレーニング」報告

川辺希和子

・・・・・・・・・・・・・・・・

6月23日、毎月開いている“九条守りたい”定例会において、大畑豊さんをお招きして念願の「非暴力トレーニング」を開いた。なぜ念願かという、以前山口で開催された「非暴力トレーニング」に参加した時から、いつか北九州の皆さんとトレーニングを体験したいと思っていたこと、知人が「非暴力トレーニング」体験を切望していたこと、それに加えて、被災地瓦礫広域処理に関連した北九州での様々なことがあったからである。

北九州では3月に市議会が全会一致で被災地瓦礫受け入れを可決してから後、被災地からの避難者の方たちや市民らが、瓦礫受け入れ焼却を止める運動を繰り広げていた。ネットを使った呼び掛け、チラシ作製とポスティング、数々の学習会・講演会開催など、その運動は様々な方法で市側と話し合い市民に訴えようと必死なものだった。何をやっても受け入れ焼却へと進んでいく中、被災地から避難された方は何度も涙を流された。彼女たちは、これ以上放射能汚染に苦しむ地域を広げたくないと、萎えてしまいそうな体力と気力を振り絞って動いていた。5月末の試験焼却の頃は地域の学校の運動会直前で、子どもたちは毎日運動場で練習していた。何としても試験焼却を止めようと、焼却場と市役所とでぎりぎりまで抗議や訴えが続いたが、23日に予定通り焼却が始まってしまった。ずっと話し

合いを探ってきたにもかかわらず市と市民とが対立していく様子、権力側の力の強さ、自分たちの見た事実と異なる偏った報道を目の当たりにして、私や友人らはショックを受けた。そして、過去現在と続いている様々な運動の困難と人々の存在を想った。

「非暴力トレーニング」を開催する意味が、もっと切実なものになった。

今回の「非暴力トレーニング」は入門編ということで24名の参加があった。「非暴力・暴力チャート」で、「自分にとって非暴力が日常なのに対して暴力は非日常だ。」という声に続いて、大韓教会の牧師さんが「暴力が日常」と言われ、税金を払っているのに参政権がないなど在日外国人の状況に触れられた。7月9日から施行された新しい入管法も、外国籍住民を苦しめる法律である。トレーニングの中で、自分や社会の中の暴力の存在に気づかされる。「怒り」についてのやり取りでも、参加者がそれぞれに課題を抱えていることがうかがえ、互いの意見交換が興味深かった。大畑さんは、参加者がリラックスして主体的に考え自由に話せる雰囲気を作りながら、問題解決のための知識やヒントを示された。関連図書は完売、不足分は注文となり、重たいリュックを抱えて来られた大畑さんは身も心も軽く帰路につかれた。それぞれに個人や社会の問題を抱えて余裕のない私たちだが、「非暴力トレーニング」は自分のあり方を問い直し、解決へのヒントを得ることのできる、有効で楽しい学びとなることを体験した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「大飯原発ゲート前の非暴力直接行動」

小林善樹

．．．．．
まず、冒頭に申し上げるべきは、この報告は非暴力平和隊・日本の本来の活動ではなく、一会員の行動報告に過ぎません。

私は昨年の3.11以降脱原発の運動に参加しています。これはNPJの活動とは異質な政治的立場に立った活動であることは承知しています。自分の国の中では、統治する側に対して自分の意見を表明することが民主主義国では当然の権利であることはいうまでもないことです。5月5日のこどもの日に北海道の泊原発3号機が定期検査に入り、原発ゼロが実現されたのだが、原子カムラは電気が足りなくなる、というデマを流して再稼動を虎視眈々と狙っていた。福島第一原発事故の現場検証もできず、事故原因の究明もできていないままに、でっち上げた安全対策すら未完成のままに。再稼動はストレステストの一次評価をやった大飯、伊方、泊の順ということで、大飯が動き出せば将棋倒しに次々に動かされるものと見なされるので、何をおいても大飯の再稼動を止めたいと考え、大飯まで出かけて来た。

6月29日は首相官邸前の無数の人々と再稼動反対の声を上げて来た。30日早朝新宿駅に駆けつけた。6時半出発の「おおいツアーバス」に乗るためだ。経産省前テント広場が呼びかけたツアーで、関

東の人が多いが、各地からの人も大勢乗っている。昨夜の首相前で声を上げていた方々がほとんどだ。近くの席の方々と交流しながら7時間のバスの旅。13時40分ころ福井県大飯町の「あみシャンホール」とやらに到着。原発交付金で建てたハコモノだろう。13時から開かれていた「6・30 おおい集会」に参加する。350人くらいが集まっている。15時からオフサイトセンターまでの雨の中のデモ、700人ものデモなんて大飯町始まって以来だろう。警察も大勢ついて来る。16時ころオフサイトセンターに到着、中にある筈の牧野経産省副大臣に要請書を渡そうとするが、受け取らないという。押し問答を繰り返した後、受け取らせる。その間、路上ではデモ隊のシュプレッヒコールが続けられた。やっと17時15分解散。

大飯町の民宿は作業員で満杯なので、高浜町の民宿に泊まる。デモやオフサイトセンターでゴタゴタしている頃に、大飯原発のゲート前は、大飯テント村の100人ほどの若者たちが車を使ってバリケードを作って封鎖し、泊り込んでいる、との情報が流れる。夕食後、全員集会。翌日のゲート前封鎖行動について、逮捕されることも覚悟している人に対する注意事項が話しあわれる。もし逮捕されたら体中の力を抜いておくことが肝要で、振り払ったり足を動かせば、公務執行妨害で逮捕されることになりかねない。手は肩から上には挙げないこと、などなど。逮捕されたくない人は脇によけているこ

とになる。あくまでも自己責任で決めることであって、バスツアーとしては関知しないこととする。バスは予定通り1日13時出立して東京に戻る。

私は6月15日の首相官邸前のアクションに参加しており、1万1千人の声を無視する野田首相にあきれ果てていたのだが、22日には4万5千人の声をも無視するという態度に対して「かくなる上は非暴力直接行動しかないか」との想いを募らせ、24日全国ネットのMLとストップ原発北海道のMLに「かくなる上は非暴力直接行動しかないか」「逮捕されても生活に困らない年金生活者の方々よ、立ち上がろうじゃないか」という趣旨のアピールを出していたのだが、賛同者が少なく準備もまったくできなかつたのでアピールを撤回せざるを得ないか、と考えていたが、屋間のおおい集会の会場の壁に非暴力行動をよびかけるアピールが貼ってあったことに期待はしていた。



7月1日6時半出発。ゲート前にはたくさんの方々が押しかけており東京ナンバーの私たちのバスを歓迎してくれる。ゲートから300mほどにある漁民公園で地元の反対者のグループとの集会をはじめたが、簡単に切り上げて、ゲート前までデモ。市民たちや前夜から泊り込んでいる若者たちと合流した。路端には各地からの車が止めてある。

原発に通ずるトンネルの手前には関電側のゲートがあってその奥側には警察官がビッシリと横並びして封鎖、その手前で若者たちは雨の中でドラムなどを打ち鳴らし、娘たちが踊り跳ねている。あたかも解放区だ。そこまでたどり着くには、車のバリケードの片側の道路脇の側溝と急斜面の間の足場の悪い所を張り回してある何本もの鎖を潜ったり跨いだりして通らねばならぬ。

その後も警察側は示威行動を繰り返すだけだったが、17時半になって、「退去しなさい。従わなければ排除する」というような警告が警察の指揮車の上から発せられるが、私たちの「再稼働反対」「暴力反対」の声でよく聞こえない。私たちは4列になってスクラムを組んで座り込む。地元の方が「非暴力で」と呼びかける。30分間2分ごとに警告を繰り返した後、18時から実力行使で排除が開始された。一人に機動隊4人がかりでスクラムをふりほども、組んだ指をふりほども、4人がかりで運び出す。座り込んだ

80人ほどの排除に1時間半ほどかかった。私たちが排除する機動隊とは別に外側に機動隊が何列かに並んで、外側からの市民たちに対峙していたが、運び出された人はその外側で地上に丁重に下ろされ解放された。そこでまた声を上げる。最先端では並べた車の上で旗を振っている様子が見える。頑張っている彼らを支援するため、こちら木にくくり付けた幟を振り回す。

牧野経産省副大臣は陸路構内に堂々と入ることをあきらめ、船でコソコソと入ったとの情報が流れる。しかし、ゲート前の抗議行動と機動隊の対峙は続く。21時には船で入った牧野副大臣らが再稼働させたとの情報が流れる。だが道路のバリケードは堅持されていた。23時55分になったら、どういうわけか、機動隊は一斉に撤退した。私たちは歓声を上げて、最先端のグループに駆け寄る。警察側はとうとう排除できなかった。これは歴史的瞬間だ。それから一時間ばかり勝利の感激を共有して、引き上げ、テント村に泊めてもらった。2日朝になって聞いた所では封鎖した車は午前2時ころ自主的に撤収したとのこと。機動隊の撤退理由は不明だが、再稼働はしたし、ゴボウ抜きはやって一応メンツは立った。これ以上ことを荒立てることもなかろう、とでもいうところかなと想像しています。逮捕された人は一人もなく、怪我した人もいないようだ。これは非暴力が徹底して実行されたからであろう。その意味で記念すべき日というべきだろう。どこの

誰とも知らぬ人たちが、何の打ち合わせもせず、トレーニングも受けないままに始まってしまった座り込みだった。こんなことは始めてという漁師の方もいたが、皆非暴力に徹していた。「非暴力」という素地は日本でこんなに定着していたのだろうか、と考えさせられた。

夏季カンパ御礼

8月2日現在、以下の28名の方々より合計193,000円の夏季カンパを頂きました。

ありがとうございます。



山内恵子	本吉美佐子	岡崎善郎
渡辺倅子	飯高京子	石田明義
秋山正敦	西富房江	柳 康雄
鞍田 東	斎藤 毅	安藤 博
大畑 豊	小笠原正仁	中村 健
大橋祐治	日置 祥隆	青木 護
馬渡雪子	石井利一	君島東彦
水谷敦夫	酒井良治	加藤 賀津
子 大石裕子	信楽峻磨	柳澤徳
次 森島久恵		

.....

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

●NP ブラッセル事務所とミネアポリス事務所の連携強化、ティム・ウォリス事務局長ミネアポリス重点の活動へ

NP は設立当初からグローバルサウスに国際本部を設けることを目標とし、第2ステップとして2008年から国際本部機能をミネアポリス事務所からブラッセル事務所に移管した。資金的にも欧州の政府並びに政府関係機関からの支援の比率が増加した。しかし、ここ数年低迷している北米における資金活動（個人、基金、国連など）を強化するため、事務局長のティム・ウォリスは当面ミネアポリスを拠点として重点的に活動することとなった。前事務局長のメル・ダンカンがニューヨーク中心に資金活動を行っている。ブラッセル事務所では、事務局次長の Kim Vetting が指揮をとっている。

●立命館大学岡田二郎二郎君をインターンとしてミネアポリスへ派遣

NP とのコミュニケーションの改善を図るために、かねてより国際事務局へインターンを派遣すべく適任者を探していたが、この度岡田二郎君を8月下旬から3カ月の期間、ミネアポリス国際事務局に派遣することとなった。岡田君は立命館大学国際関係学部4回生で、今年4月下旬から5月中旬にかけて南スーダンの NP 活動現地を訪問した。南スーダンで NP スタッフに随行して第一線の活動拠点を訪問、寝食を共にし

ながら内外のスタッフとの交流を深めることができたようである。たまたま国際事務局次長 Kim Vetting が現地を訪問中で、Kim と直接話す機会があったのは幸いであった。岡田君がインターン派遣に同意してくれたので、Kim の意向を打診し了承を得たものである。8月下旬にミンダナオで国際理事会とディレクター会議が開催される予定で、NP 事務局スタッフも3週間ほどミンダナオを訪問するとのことで、岡田君はミンダナオ経由ミネアポリスに赴任することになる。

●2012年8月、広島にて夏季実践トレーニング開催

NARPI (Northeast Asia Regional Peacebuilding Institute, 東北アジア地域平和構築インスティテュート) とは、平和の実践的トレーニングを夏の2週間、集中的に提供するプロジェクトです。8月12～24日、広島において、5日間のトレーニングコースを2週間にわたって行いました。コースの内容は、「対立と平和理論」「修復的正義」「平和教育」「歴史/文化の平和の語り」「トラウマヒーリング」「メディアーション」です。NARPI 日本チームが主体的に運営を担当し、広島の地において、東北アジアの文化的・歴史的な文脈を尊重するものです。今年は、参加者が30名、事務方が10名、計40名のトレーニングでした。詳細は、別途報告いたします。参加者国籍：韓国 日本 カナダ オーストラリア 米国 中国 モンゴル ネパール 北朝鮮 台湾 パキスタン 香港

	項目	2011年実績	2012年予算	6月末実績	進捗率(%)
1	参加費	23,300	20,000	0	
2	会費	657,000	650,000	243,000	37
3	カンパ	464,505	460,000	184,000	40
4	雑収入	39,918	40,000	0	
5	経常収入計	1,184,723	1,170,000	427,000	36
6	発送配達費	93,515	80,000	17,385	22
7	給料手当	360,000	240,000	70,000	29
8	事務所賃貸料	260,000	240,000	80,000	33
9	振込料	13,610	17,000	4,420	26
10	事務費	51,795	60,000	9,037	15
11	旅費交通費	146,510	90,000	77,440	86
12	通信費	25,540	29,000	4,950	17
13	雑費	2,520	8,000	1,260	16
14	広報費	106,050	280,000	30,450	11
15	活動支援費	326,500	350,000	103,000	29
15	会場費	26,850	18,000	0	
16	講師費用	25,000	50,000	0	
17	予備費	0	41,381	0	
18	東日本大震災支援	300,000	200,000	200,000	100
19	経常支出計	1,737,890	1,703,381	597,942	35
20	当期経常収支過不足	-553,167	-533,381	-170,942	
21	前期繰越剰余	1,085,946	532,779	532,779	
22	今期経常繰越剰余金	532,779	0	361,837	
23	特別収支				
24	前記残高	3,477,310	3,177,310	3,177,310	
25	今期支出				
	(東日本大震災支援)	300,000	200,000	200,000	100
	(インターン派遣支援)		700,000	0	
	支出合計	300,000	900,000	200,000	22
26	特別収支残高	3,177,310	2,277,310	2,977,310	
27	未払金	21,956	0	100,260	
28	残高合計 (22+26+27)	3,732,045	2,277,310	3,439,407	



Nonviolent Peaceforce

非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申込みは、**郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本のウェブサイトの入会申込ページ**をご利用くださいますようお願いいたします。

●正会員(議決権あり)

- ・ 一般個人: 10,000円
- ・ 学生個人: 3000円

* 団体は正会員にはなれません。

●賛助会員(議決権なし)

- ・ 一般個人: 5000円(1口)
- ・ 学生個人: 2000円(1口)
- ・ 団体 : 10,000円(1口)

■ 郵便振替: 00110-0-462182 加入者名: NPJ

* 通信欄に会員の種類を(賛助会員の場合は口数も)ご明記ください。

銀行振込: 三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義: NPJ代表 大畑豊

* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

ウェブサイトからのお申込み: http://np-japan.org/4_todo/todo.htm#member

●次回、ニュースレター45号(12月1日発行予定)の予告

ちくま学芸文庫 が8月に発刊した『独裁体制から民主主義へ(From Dictatorship to Democracy): 権力に対抗するための教科書』の著者で、アラブの運動を始め、近年起きた革命に大きな影響を与えている戦略的非暴力論の提唱者でマサチューセッツ大学名誉教授ジーン・シャープ(Gene Sharp)特集号とする予定です。1982年に『軍事民論』に掲載された論文『戦争の廃絶を実現可能な目標とするために』は会員の岡本珠代女史が翻訳出版されていますが、この度岡本女史に点検、改訳することをお願いし、それが完成いたしました。改訳約13,000字ですが次号に一举掲載したいと思います。

≪ Book Review ≪

『真の文明は人を殺さず—田中正造の言葉に学ぶ明日の日本』

小松裕著 小学館 2011年 1400円+税

3/11の大震災、大津波、原発事故のあと、わたしたちが再発見したもののひとつは、田中正造である。「真の文明は 山を荒らさず 川を荒らさず 村を破らず 人を殺さざるべし」(1912年6月17日)。田中正造の思想には、近代文明そのものに対する痛烈な批判と、それを克服していく道筋に関する多くのヒントが含まれている。本書は、30年以上にわたって田中正造を研究し、彼の思想の可能性を読み取ってきた著者が、3/11以後、改めて、田中正造の思想のエッセンスをまとめたものだ。(君島)